

- 1) 日英の逐次通訳訓練によってもたらされる大学生の英語の発話の変化
- 2) 高橋 絹子
- 3) 上智大学国際言語情報研究所準所員

本研究は、日英の逐次通訳訓練によってもたらされる大学生の英語の発話の変化を扱っている。TILT (Translation in Language Teaching)(Cook 2010) の枠組みにより行ったもので、逐次通訳訓練の実施前後の英語の発話の変化を、英語の自己紹介を用いて調査したものであり、他の手法と比較して、通訳訓練の優劣を述べることを目的とするものではない。

20 世紀において通訳・翻訳は、言語教育の理論を扱う際、言語学習の手段としてみなされることはなかった (Cook 2010)。その一方で、日本全国の大学には、139 の通訳コースがあると報告されているが、日本での通訳者養成は民間の通訳学校が担っていることから (Sato 2004)、その目的は多くの場合、プロの通訳者を養成するものではない (Someya et al. 2005)。また学生の動機も通訳に関する興味が主であることが多い (Takahashi 2017)。通訳訓練の効果を具体的に検証した研究は少ないことから、本研究では必ず英語を発する「日本語から英語への通訳」に着目し、英語の発話に焦点をあて、通訳訓練前後の変化を検証した。

参加者は、首都圏の大学で英語関連の科目を専攻する大学生 (3・4 年次) である。予備実験では、「自己紹介」の英語テキストのシャドーイングを繰り返し、その日本語訳を英語に通訳する練習を行った。その結果、参加者全員の録音に変化は見られず、訓練前後の録音の区別がつかなかった。本実験ではシャドーイングの日本語訳を英語に通訳する練習に加え、その日本語訳に変化を加えた自己紹介を、英語に通訳した。このようなシャドーイングと通訳練習は一般的な通訳訓練の手法である。本実験では、実験参加者の英語の「自己紹介」の録音を訓練の前後で、発話語数、発話時間、流暢さの項目で比較を行った。

その結果、すべての項目で、統計的有意差が見られた (語数:  $t(16)=-8.37, p<.001$ , 発話時間:  $t(16)=-5.72, p<.001$ , 流暢さ:  $t(16)=-3.94, p<.01$ )。さらに訓練前後の録音を無作為に入れ替え、1 名の英語母語話者に全員の録音を聞いてもらったところ、1 名の録音を除き、訓練の前後を正しく判別できた。さらに訓練後の録音は、全体的に発話に自信が感じられ、抑揚がつき、語末の母音挿入が減少し、より英語に近く聞えるというコメントを得た。書き起こしたものを分析してみたところ、訓練前には使えなかった家族の紹介の表現や、通訳時の日本語に含まれてた表現を英語にした表現が入れられていた。文法面では、関係副詞の when も挿入されていた。これはシャドーイングをした英語の日本語訳を通訳する際には、よく理解した内容をインプット (Krashen 1985) でき、そのインプットしたものを通訳で半ば強制的にアウトプット (Swain 1985) をしなければならないことでもたらされた効果ではないかと考察できる。通訳の際には、話す内容を考える必要がないので、文法や単語などの英語運用に認知資源を回すことができるという利点も影響しているのではないかと考察できる。本研究で効果が観察されたのは、自己紹介に限定されているが、他の題材に変えることでも、同様の効果が期待できるのではないかと推測される。